



TITLE:

京大広報 No. 204

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 204. 京大広報 1980, 204: 21-24

ISSUE DATE:

1980-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209482>

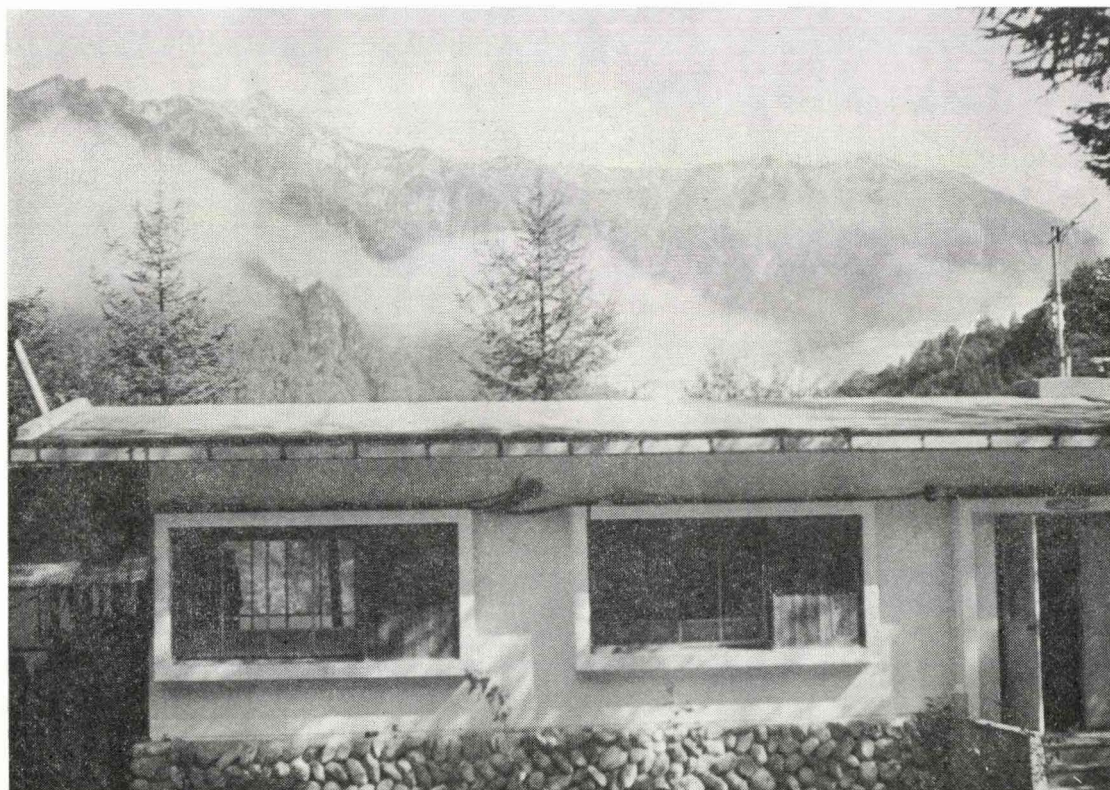
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 204

京都大学広報委員会



笠ヶ岳を背にした防災研究所・穂高砂防観測所——関連記事本文23ページ——

目 次

部局長の交替.....22

自衛消防団の活動.....22

<随想>

大学における数学の教育

名誉教授 奥川光太郎.....22

<紹介>

防災研究所・穂高砂防観測所.....23

された。

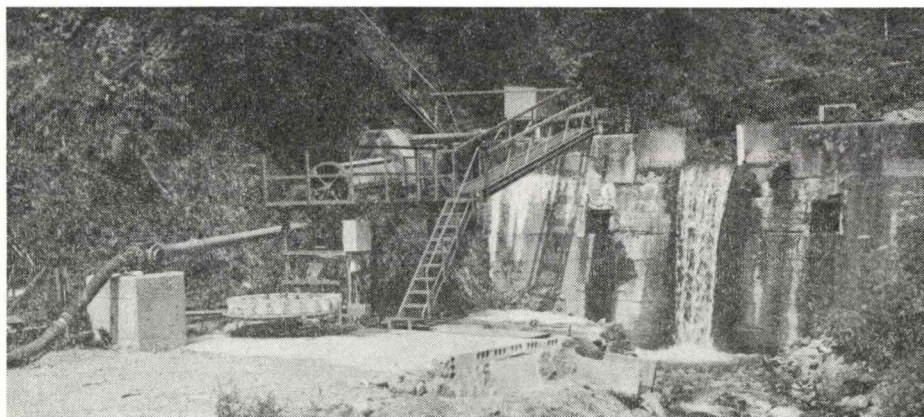
昭和41年度は土砂特性試験室が新設され、昭和42年6月から防災研究所附属の研究施設となり、本格的な観測が開始された。初代施設長は砂防部門の矢野勝正教授が併任し、昭和46年3月同教授定年退官にともない、砂防部門の芦田和男教授が二代目施設長となって現在に至っている。本観測所の職員は助手1名、技官1名、非常勤職員1名である。

本観測所は山岳地帯における降水の実態と洪水及び土砂流出の実態を解明するために、足洗谷流域内にヒル谷観測点及び足洗谷本川観測点を設け、ロボット雨量計、水位計、流速計、8ミリカメラ、35ミリカメラ、TVカメラ、流砂量測定装置などが配置され、一部の装置は有線及び無線テレメーター化されている。以上のような観測設備によって得られた観測成果は、砂防部門との密接な協力のもとに解析され、多くの研究成果をあげている。とくに、土砂礫の流出現象を常時観測す

る施設は世界的にも例がなく、土石流及び洪水時の土砂礫の流出量に関する継続観測成果は、内外の研究者から貴重な資料として注目されている。一方、資料の解析研究も進められ、山地河川の状態と流砂観測の成果から、土砂礫の流出過程に関する新しいモデルを確立し、流出土砂量の予測法に関する研究が進められている。さらに、土石流の特性に関する研究成果をもとに、砂防工事が足洗谷流域で行なわれている。

本観測所は南に焼岳の噴煙を望み、北に笠ヶ岳の霊峰を仰ぐ谷間の台地に広がる奥飛騨温泉郷にあつて、観測所を訪れる内外の研究者や一般の見学者も年々増加している。今年も8月29日には、国際地理学会の一行約40名の来訪があるなど、来訪者の増加と研究資料や設備の増加にともない現在の研究棟が狭小となり、現在、観測室・研究室（約150 m²）の新営工事が進められている。

（防災研究所）



ヒル谷の試験ダムと自動流砂測定装置

